

森林獣類による被害調査と個体数センサス法の確立

平成15年度～17年度（国補システム）

佐野 明

ニホンザルによる農林業被害が県内各地で深刻化しており、地域によっては重大な社会問題となっている。このため、本年度は地域住民が効率的な追い払いを行なえるよう、ラジオテレメトリーを利用して、群れの接近をいち早く探知し、その情報を共有するシステムの整備を行った。また、市販の農漁業用資材を利用した簡易な侵入防止柵を試作し、その効果判定試験を行った。

試験地は三重県名張市赤目町の集落および農地である。この集落には通称「名張B群」が頻繁に出没し、農作物等に加害している。また、この群れの中の成獣メス1頭には電波発信機が装着されている。

2005年4月、集落の住民に対して、ニホンザルの生態と被害防除対策について簡単な説明をした後、当研究部が試作した「漁網(ナイロン製刺し網)と農業用資材(グラスファイバー製ポール)を組み合わせた簡易猿害防止柵」(図-1a)を住民とともに設置した。材料費は約1100円/mであった。支柱にはグラスファイバー製ポールを用い、「大きくしななって登りにくい」構造になっている。しかし、それではサルが網を引っ張った場合に、群れの中の他個体が乗り越えて侵入しやすいため、支柱を2本にして庇(ひさし)を設け、網が引っ張られると、その部分が「立ち上がってくる」よう工夫した(図-1b)。また、網の「すそ」を1mほど地面に垂らし、その上に水田用の防草シートを敷いて金具で固定した(図-1c)。2006年3月末現在で、柵を乗り越えて群れの中の数頭が侵入したのが一度あったのみであり、網の下からの潜り込みはなかった。前年度に紀和町で行った試験結果と併せ、少なくとも下からの潜り込み防止と維持管理、特に草刈りの省力化には有効であることを確認した。

また、この集落に基地アンテナを設置し、住民自らが受信を行い、接近を探知した場合には電話連絡網と旗の掲揚で知らせるようにした。特に夜間の受信を行い、付近をねぐらとしていることが判明した場合には、翌朝の加害が予測されるため、早朝からの追い払い実施を呼びかけるようにした。さらに、近隣集落の代表者とも連絡を取り合い、集落間でも群れの位置情報を共有できるようにした。これらの体制を整備することで、被害軽減に対してどれだけの効果があったかは不明であるが、住民の意識改革には繋がったと思われる。



図-1. 現地適応試験に供試した簡易猿害防止柵

a, 簡易猿害防止柵の構造； b, 庇部分； c, 管理コスト軽減と潜り込みの防止のための防草シートの敷設。